

「明鏡」の比喩について

——中国仏教と日本禅仏教の比較より——

宮地 清彦

瑩山は道元が伝持してきた中国禅思想の体系化、即ち日本曹洞宗思想への合成を進めることで、教団の思想的背景の強化は必須事項だったはずである。そこには事事無礙観が陥りやすい楽天的発想への危機感があっただろうし、人間の内的認識作用を熟慮する中で、理と事の相関関係、事から理への過程の厳密性を求める必要が出てきたのである。自己否定が自己消滅につながり、無事禅のような惰性の禅に向かうことこそ、瑩山にとって最も怖れていた事象であろう。本論は、さらに瑩山と中国仏教の関係を考えていく上で、「明鏡」の比喩を媒介としながら、澄観と延寿との比較論を展開したい。

さて、「鏡像の比喩」を用いる時、避けては通れない課題として鏡本体と映る像との関係が挙げられる。例えば、鏡と映る像が無二・一体であるとしても、本体である鏡を知り得た時、映る像を虚と見なし失われる存在と考えることがまず可能となる。そうになると、鏡Ⅱ内在する仏性と考えた場合、我身と我身の織り成す因果すらも最終的に生じない存在となる。これとは別にもう一つ立論できうるのが、映る像自体が鏡であるとするものである。像の外側に鏡があるわけではなく、像Ⅱ鏡であるから内在するという観点も成立しない。これらは華嚴教学で無住（不動）・無側と呼び、二つの相反する範疇を設けていない。

前半の論はさしずめ如来蔵思想の典型例と言うべきであり、自然と生成する側・される側の関係が生まれ、後者は消失していくこととなる。後半の論は悉有仏性的ニュアンスを持ち、すべては対等なものと思なされる。

澄観『華嚴経疏』巻十四にて「鏡」への言及をしているのだが、主に後者の立場に立ちながら、人間の識を根底に置く論理を展開し、かつ幻師（鏡）と彼が織りなす幻影（像）なる存在を用いて、生身の人間への教化を説く。澄観は別所で「赤肉団」の語を用いながら、生身の人間の心と仏性との関係を説いており、これらのことから、如来蔵思想に顕著な仏性絶対主義では自己消滅の論理に行きつくため、『起信論』等にある「鏡」の比喩を足がかりとしながらも、独自に人間の生を感じる「鏡像の比喩」を見出したのである。

瑩山『伝光録』第十一・十三祖章にて、我心は忘れられるべき存在であり、心によって道理を明らかにすることも否定され、法身法性方法一心即ち不変・清浄のみを究極的存在と見なさないと説く。つまり、鏡だけの単独存立を認めず、像に当たる諸事象肯定する姿勢と言ってよい。こと「鏡像の比喩」に関しては澄観に近いものが感じられ、かつ第十三祖章で述べる「如幻三昧」は、澄観の幻師と幻影の比喩との関係性で探求されねばならない。

澄観の禅思想と『楞伽經』を取り入れ、独自の如来蔵説と「如幻三昧」説を導き出したのが、延寿の『宗鏡録』である。巻一で『楞伽經』の理が天台や華嚴を含めた教理教学を収め尽くし、これを踏まえた上で一心為宗を説くのが『宗鏡録』であ

ると説く。

卷二において一心が諸法をなす例として、火が草や木に燃え移った時いろいろな燃え方をするように、あるいは水が酒や熱いお吸い物になることを挙げた上で、「任立千途、皆是一心之別義」と結ぶ。これは明らかに鏡と像が絶えず一体であることを示している。『楞伽經』では第八地以上の境界に達し、自覚智を得た者が享受するとされる「如幻三昧」及び類語が多々見られるのだが、『宗鏡録』にて『華嚴經』等の諸經の例を取りながら「如幻三昧」は学すべきものであり、これによって真実を悟ることができるという幾度も強調する。

如来蔵を絶対視することによって、人間の生の実感を消滅させたのでは修行の意味はないし、仏教の伝播も考えられない。三者が「鏡像の比喻」で説いたのは如来蔵大悟の瞬間ではなく、その前後も生き続ける人間の姿、「生きた禅修行」だったのである。

第八部会

日蓮の宗教性の原体験

——正嘉の大地震と禍の預言の形成——

笠井正弘

一 問題の設定…内村鑑三『代表的日本人』の日蓮像

内村が、日本人にとって最も誤解されている人物、とみなしたのは、日蓮の〈宗教性〉の本質に、ユダヤ・キリスト教文化の中核をなしている〈真性の預言者〉としての宗教性が感得されたからである。この宗教性は歴史的個性として新旧聖書世界を形作ってきた。問題は、なぜ日蓮に〈真性の預言者〉的宗教性が現れたのか、そして何が日本人に日蓮を解らなくさせているのか、にある。それは預言者宗教の歴史的個性に関わる問題である。

二 マックス・ヴェーバーによる〈預言者類型〉…『世界宗教の経済倫理』より

〈使命的預言者〉…〈模範的預言者〉…〈禁欲主義〉…〈神秘主義〉
 〈神の道具〉…〈神の器〉…〈人格的神観念〉…〈非人格的神観念〉
 〈禍の預言〉…〈招福の預言〉…〈血（現世）の評価〉…〈血の評価〉

三 〈禍の預言〉の〈禍〉の内容…地震・飢饉・伝染病・彗星出現・他国からの侵略など、人智で制御できない現象を指して